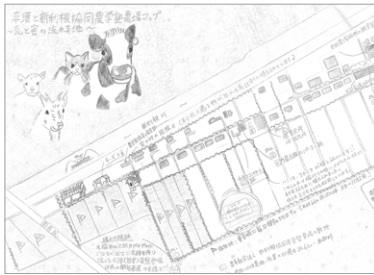


新利根チーズ工房 プレオープンイベント



右から牧場主の上野裕氏、チーズ職人の西山厚志氏、講師の藻谷浩介氏

▶10月14日
(茨城県稲敷市)



当日配布された
「平須と新利根協同農学塾農場マップ」



同農場の牧場は圏央道の直下に位置する。
牛の飼育に影響はないという



新築されたチーズ工房。
今秋のオープンに向けて準備中である



当日は稲敷の産品とチーズなどの軽食が用意され、参加者らを喜ばせた

過去を振り返り、現在を見つめ 集落の未来に思いを馳せる

新利根協同農学塾(茨城県稲敷市)で10月14日に新利根チーズ工房のプレオープンを記念したイベントが開催された。主催したのは代表理事を務める上野裕氏だ。牧場の一角にチーズ職人を招き入れ、新鮮な生乳を加工し、地元で消費するしくみをつくりたいという思いを実現するため、に動いてきた人物である。この日は、『里山資本主義』や『デフレの正体』などの著書を持つ藻谷浩介氏を講師に招いて、構想から数年の時を経てまさに形になりつつあることを披露する場となった。

まず、圏央道の直下に広がる牧場に案内され、上野氏から牧場と彼らが暮らす集落について紹介があった。続いて、外観が完成し目下オープンに向けて準備を進めている工房の前で、チーズ職人の西山厚志氏が、参加者に向けてチーズづくりへの思いやこれまでの経緯を語った。

新利根協同農学塾は戦後満州から引き揚げた上野氏の祖父、満氏が開いた「新平須協同農場」を起源に持つ。その協同農業の思想を伝えるための私塾として始まったのが、新利根協同農学塾である。稲敷市は米どころとして豊かな土地柄だが、平須集落では、田んぼに肥料を入れて草を育てて養豚や酪農に踏み切った。最新鋭のミルクングパーラーを導入するなど、高い志を持って先進的な取り組みをしていたという。

しかし、高度経済成長を経て、世の中が変わっていくなかで70年代後半に協同農場は崩壊した。その後、円高が進むと、輸入飼料を与えて乳量上げる施設型の酪農に移行し、集落は賑やかさを失っていった。上野氏もかつては輸入飼料中心の

酪農経営を目指していたが、経営危機に陥った際に、取り入れたのが府県では珍しい放牧経営だ。乳量は大いに減ったが、牛が健康になったことで経営が改善した。それは同時に理想とする生き方、周りとの関わり方も変えた。

いまや生乳加工をするなら6次産業化の制度を使わない手はない。しかし、今回チーズ事業を興すにあたり、自身が加工に手を出すのは得策でないと判断した。牛飼いをしながら地域を守るために招き入れたチーズ職人とともに、参加者らに未永い支援を呼びかけた。

牧場や新築工房を見学した後、稲敷の産品とチーズの軽食をとり、集落の散策をしながら、この地の過去、現在、未来に思いを馳せる予定だったが、当日はあいにくの雨模様で、集落の公民館での講演となったことだけが残念である。(加藤祐子)